



特にない



川崎ゆきお

「何かなかったですか？ 昨日」

「さあ、特に」

「何かあったでしょ」

「それやありますよ。でも言うほどのことじゃない」

「どんなことですか」

「急に言われても思い出せませんよ」

「でも、何かあったでしょ」

「何もなければ、記憶喪失ですよ。何を食べたかを思い出してみます」

「はい」

「すぐには出てきませんなあ」

「昨日のことでしょ」

「豆腐の味噌汁」

「ほう」

「これは毎朝なので、思い出さなくてもいい」

「じゃ、思い出して言っているんじゃないのですね」

「今、詳細を思い出し中です。あれは、ああ、そうだ再現できました。おつゆの子です」

「おつゆの子？」

「味噌汁に入れる子です。具です」

「だから、豆腐の味噌汁なので、豆腐なんでしょ」

「最後の豆腐でした。思い出しました。買い置きはそこまで、また買っておかないとだめだなあと思いました。これは記憶がいい方だ。いつもはなくなってから 買いに行ったりする。豆腐はですねえ、二パック入りなんです。一パックはまあ半丁でしょうか。いやそれより少し小さいかもしれない。なぜなら分厚いのです。だから、正確な体積は分かりません。書いてあるはずなんです。目が悪くて、そこまで見ていません。何グラムかってね。これって、中に入っている水も計算に入れるのでしょうかねえ」

「豆腐の話はそれで終わりですね」

「まだあります。昨日もその一パックの半分が残っていました。それを入れました」

「はい、それで終わりですね」

「おつゆの子、味噌汁の子の話はまだです。昨日あったことの一つとして、このおつゆの子が違っていたのですよ。いつもは大根を薄く切って入れるのです。薄 けりゃ薄いほどいい。その方が早く煮えるのでね。その大根を切らした。大根を切ったじゃなく、切らした。食べ切っていた。味噌汁の第二の子の大根がない。これを次男、あるいは次女と呼んでいます。そこで、白菜を入れました」

「それで、終わりましたね」

「いや、思い出せば出てくるものです。白菜なんです。半分に切ったものを買っていました。その断面に新芽というか葉が真ん中から出ている。これをですねえ、ちぎって入れました。ここが柔らかいのですよ」

「終わりましたか」

「はい、昨日何があったかの解答はそれです。味噌汁の第二の子が白菜になっていた。これでした。これ」

「はい、終わりましたね」

「味噌汁の話はそれで終わりましたが、他に何かなかったかと聞きませんか？」

「もう聞きません」

「そうですね。だから話すほどのことじゃないって最初に言ったでしょ。聞いていて退屈されたでしょ」

「いえ」

「その後、散歩に出たのですが、前日よりも寒い。それでマフラーを今シーズン初めて巻きましたよ。これは昨日あったことの一つです。巻き方、結び方の話をしますか」

「その話も、いいです」

「だから、最初から言ってるでしょ。昨日は特に何もなかったって。無理とにあなたは、言わせるからですよ」

「はいはい、分かりました」

了